

卒から組士へー加田家文書より

1. 雑賀教育資料館・先人記念館調査で見つけた古文書

平成29年度から、雑賀先人記念館・教育資料館の所蔵資料調査をしています。同館は雑賀小学校の一角にあり、その名の通り雑賀にゆかりのある先人を顕彰し、教育などに関する史料を展示する施設です。常設展示室には雑賀の教育者「渡部寛一郎」「久保田愛之丞」「尾原総八」「澤野修輔」のパネルが並び、展示ケース内に教科書・卒業証書・学校印・和算関係史料などが陳列されています。教科書や典籍が大部分を占めるなか、引き出しに収められていた2つの書類ケースの中から古文書を見つけました。既に整理されており、手書きの目録・読み下し文と共に、「親類書」「勤功録」「履歴書（和田頼存・島根県庁）」「御成御献立」などの古文書が入っていました。

その中で、一冊の古文書の表紙に目が止まりました。

「十一月廿三日／此度新番組入被仰付候二付而／前々聞合見合物覚留／加田」
少々意識ではありますが、「新番組入りを仰せ付けられたので、前もって見聞きした物を書き留めたもの」と書かれています。藩士が出世する際に実際に準備したもの、心得などが書かれた文書はほぼ残っていません。今回はこの古文書を元に、新番組入りの際に必要なものをご紹介します。（題名が長いので、以下「新番組入りに付き覚留」とさせていただきます）

【写真1】雑賀教育資料館



2. 筆者加田才蔵と「新番組」

「新番組入に付き覚留」の筆者は、加田才蔵（後に房右衛門）・熊五郎親子です。内容をご紹介する前に、加田才蔵と「新番組」について説明します。

松江藩の武士には「士」「卒」の階級があり、簡単に説明すると「士」は藩政を、「卒」は主に下役をつかさどっていました。加田家の格式は代々「卒」でした。加田才蔵は文政 10 年（1827）7 月 27 日に御勘定所見習として召し抱えられ、天保 12 年（1841）6 月 12 日に父才兵衛の跡を相続し、給米十三石四人扶持、格式「御徒並」に命じられます。郷方留付・人參方元々・両蔵内改など勤めた後、文久 3 年（1863）11 月 23 日に十八石五人扶持で「新番組」に取り立てられました。

「新番組」というのは松江藩の格式の一つで、「卒」が出世し、「士」に取り立てられた際に所属する最初の格式です。世襲制ではなく一代限りの身分ですが、嫡子は跡相続時に「卒」の最高位である「御徒」として召し抱えられます。祖父の道加が天明 7 年（1787）に先代から跡を引き継いだ時は給米五俵二人扶持ですから、加田家は三代かけて出世していったこととなります。新番組入りを果たした才蔵は感慨深かったことでしょう。表紙を見ると、その喜びや緊張感が伝わってくるような気がします。

3. 「新番組入に付き覚留」

「新番組入に付き覚留」には

- (1) この度新番組入仰せられ候につきて前々聞合い見合い物覚留
- (2) 11 月 24 日に筆相筆頭に差し出した覚えの控え（大木忠之助の処遇について）
- (3) 口上之覚（改号願い・唯右衛門（才蔵）が房右衛門へ）
- (4) 覚（親類書控）
- (5) 熊五郎と共に回るお礼先・方法書き上げ
- (6) 慶應元年 11 月 17 日頃大木忠之助引っ越し付届出控え
- (7) 慶応 3 年 1 月 14 日武器書き上げ



の七つのことが書かれています。このうち、(5)までは新番組入りの前後に書かれたものです。才蔵は慶応2年(1866)12月1日に亡くなっているため、(1)～(6)までは才蔵が書き、(7)は息子の熊五郎が書いたと考えられます。同文書によると、新番組入りの際には、A.書類の提出、B.挨拶回り・お礼回りが必要とのことでした。

【写真2】「此度新番組入被仰付候二付而前々聞合見合物覚留」表紙
(加田守夫家蔵、雑賀教育資料館・先人記念館寄託)

A. 書類の提出

まず(1)より、書類の提出の中で取り急ぎ必要なのは、「列士録」を編纂している列士録方へ提出する袋入りの勤功書(勤務・賞罰録)で、おそらく正式な辞令交付日より前に新番組筆頭役の山内丈蔵へ提出したようです。「おそらく」と書いたのは才蔵が月を書かずに「朔日(1日)」と記したため、文書自体が時系列で書かれていることからの推測です。新番組筆頭役の山内丈蔵へは、他に家族を書き上げた親類書2通(上記(4))、また、17才以下か働いている嫡子・隠居・同居人(上記(3))がいる場合は書面を提出しました。

B. 挨拶回り・お礼回り

挨拶回り先としては、新番組の関係役所の御仕置方御添役・御目附・番頭衆、また、表御家老方・中老・御番頭中・同じ新番組士にも挨拶をしたようです。また、それとは別に嫡子やご祝儀を伴うお礼回りもされていたようで、息子熊五郎と共に羽織袴を着用して支配頭並びに筆頭両家へ挨拶に出向くこと、御徒歩目付には銀二匁、酒切手壱斤を手紙と共に送ることなど、関係先へ銀・酒切手・箱折などをご祝儀として配っていたことがわかります【表1】。

【表 1】 お礼先一覧

挨拶先	表御家老方・中老・御番頭中・新番組士	--
	御仕置方御添役・御目附・番頭衆	--
	支配頭並びに筆頭両家	嫡子を伴う
祝儀持参	御徒目付	手紙・銀 2 匁・酒切手 1 斤
	日貴村主	銀 2 匁ずつ
	御代官所	銀 10 匁
	支配頭・筆頭両家	酒切手 2 升・肴一種
	列土録方	箱折 1 束
	山	銀 3 匁・酒切手 2 升、盆節季に酒

4. その後の加田家

前述の通り、慶応 2 年（1866）12 月 1 日に才蔵が亡くなり、翌 3 年 1 月 24 日に給米十八石四人扶持・格式「御徒」として熊五郎が跡を相続します。明治以降、熊五郎の名前はどこにも出てきませんが、同家からは加田頼存が松江県残務掛、島根県庁土木課を歴任した後広島県庁に移り、宇品港の建設に携わります。明治維新がなかったら、順当に出世し、新番組より上の格式になっていたかもしれません。

雑賀先人記念館・教育資料館の史料調査は、『松江市史』編纂終盤の多忙な時期と重なりいつもよりも時間がかかりましたが、この11月にいよいよ終わりを迎えました。今年はコロナ禍で、残念ながら開館日が少なく企画展も計画されていませんが、機会があれば是非足を運んでみてください。

(松江市史料調査課・歴史史料専門調査員／高橋真千子／令和2年12月1日記)

【参考文献】

- 『松江藩列士録』全6巻(2004年3月～2006年3月、島根県立図書館)
- 正井儀之丞・早川仲『雲藩職制』(1979年7月、歴史図書社)
- 中原健次『松江藩家臣団の崩壊』(2003年6月、オフィスなかむら)
- 山本慶造『明治官員録』(1881年3月、国立国会図書館デジタルコレクション)
- 「新番組抜取帳坤」(島根県立図書館所蔵)
- 「士族禄高」(島根県公文書センター所蔵)